

開会 令和元年8月22日
閉会 令和元年8月22日

足利市総合教育会議

足利市教育委員会

令和元年度第1回足利市総合教育会議会議録

- 1 開催日時 令和元年8月22日(木)
開会 午後4時00分 閉会 午後5時15分
- 2 開催の場所 足利市役所4階 特別会議室

- 3 出席者

市長	和泉 聡
教育長	若井 祐平
教育委員	笠原 健一
教育委員	市橋 雅子
教育委員	菊地 義典
教育委員	照本 夏子

- 4 会議出席した事務局職員

総務部長
行政管理課長
教育次長
教育総務課長
生涯学習課長
学校教育課長
教育総務課庶務担当総括主幹
教育総務課庶務担当副主幹
学校教育課指導担当指導主事
学校教育課指導担当指導主事

- 5 傍聴 傍聴者 1名
報道機関 1社

- 6 会議日程

日程第1 議題(1) 足利市の子どもを伸ばしたい!
～諸施策の展開に向けて～

7 議事の経過

○ 開会

○ 和泉市長あいさつ

皆さんこんにちは。お忙しい中、今年度の第1回となります、総合教育会議にお集まりいただきましてありがとうございます。

教育委員の皆さんにおかれましては、日頃より本市の教育行政にご尽力いただき、あらためて御礼申し上げます。また、本日はお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。

夏休みも半分以上が過ぎまして、子どもたちの事故等の報告もなく無事に過ごしているようでホッとしています。

すでに、ご案内のとおり、教育委員会では、「目指すべき子ども像」「求められる学校像」について、教育理念としての観点から教育委員会で検討を始めています。その中で導き出される、より良い教育環境にするための具体的な条件整備については、全庁的に検討するとともに、教育委員の皆様はもちろん、市議会や保護者・PTAの方などのご意見をいただきながら議論を深めていく必要があります。

そこで、本日は、足利市の子どもたちの現状は今どうなのか、これから、社会が変化していく中で主体性をもって生き抜いていくためには、どのようなどころを伸ばしたら良いのか、という視点から、足利市の子どもを伸ばしたい！というテーマで、教育委員の皆様と意見交換をしていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

○ 若井教育長あいさつ

それでは、一言挨拶を申し上げます。今日は、国では子どもたちにどんな力をつけてほしいのかということで、その一端を紹介します。文部科学省が作成した、生きる力、学びのその先へ、という保護者向けリーフレットの一部を皆様にお配りしました。裏面に2020年度から始まる新学習指導要領に込められた願いとして、「これからの社会が、どんなに変化して予測困難になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、」ここが生きる力を文章化したものであります。生きる力を身につけさせたいという考え方はこれまでと変わっていません。引き続き国はこれからも生きる力、を身につけさせたいと思っています。そして学びのその先へと書いてありますが、これは、学校教育が終わっても将来にわたって様々な課題が出てくる中で学び続ける時代になってくると思う。そのような国の考えを紹介してあいさついたします。

○ 日程第1 議題(1)

学校教育課長

足利市の子どもたちの現状と学校で取り組んでいることなどについて説明

市長

今資料の説明があった。この資料の説明に関係すること、また関係しないことでも結構、今日のテーマは「ここを伸ばしたい」ということであるが、狭くとらえず「ここを伸ばしたい」というところを出発点にして、足利市の子どもたちの学力・性格・人格形成も含め、子どもたちの取り巻く環境等について最近思われていること、あるいは教育委員の活動をとおして感じていることを教育委員の皆さんに伺いたい。最初に市橋委員。

市橋委員

内閣府の調査では、引きこもりが全国で70万人。予備軍150万人と言われている。社会的自立の大切さを感じる。社会を生き抜くために必要な力を持つことが大切。社会が日々変化のある時代で、その時代の変化を受け止めて未来を切り開く力が子どもたちには大切であると思う。

1つ目は、夢・目標を持って主体的に学ぶ力が大切。どんな大人になりたいか。どんな職業に就きたいか。スモールステップの目標でも良い。何か目標を持つことが大事。そうすれば主体的に向かっていると思う。主体的に学ぶことの一つに「学びのすすめ」の推進があり、市内に広めていただきたい。先日仙台市に視察に行った。スマホ携帯に関する川島教授の本を読んで考えてみた。スマホ等を適切に使わないと脳科学的に大変な影響を与えてしまうということ。これを保護者や地域の人にわかってもらいたい。仙台市の7万人以上の小中学生の調査結果のデータであり、間違っていないと思った。スマホでも1時間以内の使用がベストとの統計データもあった。

自転車競技で、オリンピックの期待がかかる梶原由美さん、筑波大学の学生さんのテレビを見た。親御さんからお年玉をもらうときに必ず、今年の目標はと聞かれると必ず答えたそうである。現在、コーチやマネージャーはいない。自分で計画して主体的に行動している。金メダルを目指すところまでの力をつけている。夢や目標の大切さを感じた。

2つ目は、社会で生きていくと困ることがたくさん出てくる。そういったときに、困難を乗り越える力をつけてほしい。耐性というのは、不満足な状態に耐えて、感情や欲求を自己制御しながら、問題を解決していく力。感情をコントロールしながら問題を解決していく力をつけてほしい。そのためには健康で素直な心が必要。コップを立てると水はたくさん入るが、斜めでは少ししか入

らない。コップを立てるということ、これが素直な心であり、素直な心は自然からの最大の贈り物であり、別の言葉でいうと、自己肯定感、自尊感情。自尊感情が高い子どもは物事も積極的に取り組むことができる。また何事にも挑戦し、立ち向かい、困難に立ち向かえると言われている。そのようなことから、子育ては家庭教育の中でも重要なことであると思う。

3 つ目は、吉田哲也先生が社会の中で生きる力について「人は人によって人になる。」と話していた。人が生まれて最初に出会うのは家族。最初に出会う社会は家庭。人とのつながり方、コミュニケーションの仕方を学ぶ。人の中で生きる上では、やがて学校に行き学ぶ体験、地域での体験が大切である。学校での学び合いの良さは、わからないことを友達に聞くことで全ての子どもに学力をつけてやれる。わからない所があったら友達に聞きそして教え合うことで、わからない所をそのままにしないで友達あるいはグループの中で学べる。これが子どもたちが力をつけていく上では大事な学び合いであると思う。よく子どもたちが群れるといますが協力し合う体験、助け合う体験など大事だと思う。これがやがて社会の中で生きていくうえで重要な力になると思う。北中に以前いた堀江先生は学びあいを大事にして、とても良い授業をしていた。

市長

仙台市のスマホと携帯の話が出ていた。菊地委員、照本委員も子育て中であると思うが、お子さんとのスマホルールみたいなものは作っているのか伺いたい。

菊地委員

スマホのルール、夜の時間は決めているが守れていない。ある意味野放し状態になっている。ではどうやってモニタリングをするかというところ、親のフィルタリングで使用アプリを把握して確認している。あまりにも行き過ぎているときは止めるように話しているが、中3と高1の子どもなのでルールを作っても守らず難しいところである。

照本委員

私の子どもは現在高2である。スマホは高1で買った。買った当時は興味がありゲームに夢中であった。高校生になったというストレスもあったと思う。スマホ使用の時間を見て声をかけて様子を見るところから始めた。その後、スマホの時間と受験の関係がわかってきた事から1年生の後半からは自然に勉強中はスマホを別の部屋に置くようになった。今は試験明けにスマホを使用する時間が増えてきた。試験が終わった日は私も何も言わないが、その後続くようであれば声をかけるようにしている。ルールを作っても守れるような気がしな

いので、声かけで防止をしている

市長

スマホについて、学校から家庭へのお願いや子どもへの指導はどのようにしているのか。

学校教育課長

これはリテラシーの部分になるので、学校では担任や生徒指導を中心に話している。また、親にはフィルタリングをかける、使用時間を決める、家庭の中でルールを決めるなどを投げかけている。実際にそれが動いているかどうかは、子どもへのアンケートの調査結果を見ると、フィルタリングがかかっていますかの質問に対し子ども自身がわかっておらず、わからないと回答する子どもが多い。また、夜中まで使っている、家庭の中でルールを決めていないと回答する子どももいる。

指導主事

私も3人の男の子どもがおり、今年次男が高校1年生になったのでスマホを購入した。スマホは高校生になってからと家庭のルールを決めている。与えた時はうれしくてかなり使用していたが、家族で時間を過ごすときは手放すように徹底して指導した。主にスマホの利用はユーチューブ、友達とのラインが多い。子ども自身がいつも身近に持ち歩き便利に活用しているが、親としては気にかけていかなければならないと思う。学校においては道徳の教材において情報リテラシーということで扱っている。自分自身に悪気無くても結果として友達を傷つけてしまうというような教材の内容となっている。

指導主事

小学校から中学校になるにつれスマホの所持率がだんだん高くなっていく。私が北中にいたころは自分のものや親のものなどを使用して最終的には7割近くが何らかの形でスマホに関わっていた。各学校では先生を集め研修会を開き情報を得て、子どもたちにはスマホの使い方などを指導している。家庭には学年部会などを通じて話をしているが、全員がそろわないことから全家庭につなげることは難しいところもある。各健連協でもこのテーマを扱い話し合うこともあるが、スマホを持たせるのは親の責任なので家庭のことはなかなか難しいと思う。中学生でもユーチューブ、ラインが多く、ライントラブルも学校の先生が対応している。親に責任を持たせながらも学校が対応している。私の息子は中学1年生でまだスマホは持たせていない。しかし、スマホのみならずゲーム機器などからもネット系でつながってしまい家庭内でコントロールするのは難

しいところがある。

市長

我々が子どもの時代と圧倒的に違う要素はこの要素である。これをどうコントロールするかということが学力や子どもの成長に直結するものだと思う。まさにここを伸ばしたいという中で子どもたちの成長やジャンプアップを阻害しかねない要素となってくるので継続して点検・議論が必要だと思う。次に笠原委員のコメントをお願いしたい。

笠原委員

子どもたちをどう見るかということに関しましては、学校に行きますと小学校でも中学校でもよくあいさつをしてくれる。私が子どものころは恥ずかしさが先だってあまりあいさつをしなかったように思う。今はどこへ行ってもあいさつをする。素晴らしいと思う。あいさつというのは習慣でもあり、コミュニケーションのスタートはあいさつから始まる。人が生きていく、人が関わっていくときにあいさつができるということは大切である。あいさつができない人間に良い仕事はできないというテレビCMがあった。あいさつから始まってコミュニケーションが成り立ち、相手を認め合ったり相手を気遣ったり支えあったりしそこから発展していけば本当にいいと思うし、そのスタートはあいさつにあると思う。これからも子どもたちがあいさつをする学校であったり、社会であったりしてほしいと思う。

逆に心配するのは、私たちにというか、親の世代の方の問題だと思う。

「足利なんて」というフレーズを使う方がいる。足利も良いことばかりではなく、悪いこともあると思う。強調して言うことではなくて、課題であるから何とかしなければならぬのは確かである。地元に対してマイナスイメージをより強く伝える方がいる。それを子どもが見ていると足利の魅力を勘違いしてしまうのではないかと思う。自然・歴史のことに限らず足利は素晴らしいまちだと思う。子どもたちが間違っって受け止めてしまうと困る。足利の良さを課題も含めて正確な足利を子どもたちには知ってもらいたい。間違っていることを植え付けてはいけない。また、私たちの時代は物がなかった時代である。将来が明るくなるというのを期待していた時代である。今は足りないものはなく欲しいものはある時代。将来的な伸びしろというか明るさを昔の子どもよりもそう思っている子どもが少ないと思う。親も今の状況よりも良くなるけれども今だっってそう悪くないと将来や明るい未来を期待する動きが少ないと思う。

今の努力は将来報われるのだ、今頑張れば大人になっていいことがあるんだ、今努力することに関して、今で十分だそんなに頑張らなくていいという風潮があるとすれば、それは変えたいと思う。将来はもっと未来が明るく。実感とし

て子どもたちはどう思っているのか、今に満足してしまっているとしたら、将来に対しての努力が損なわれている時代であり、困るなど思っている。

市長

今いくつも論点が出てそれぞれに興味深いので展開したいところであるが時間の関係もあることから、一つポジティブなあいさつの話が出ました。先日、三重小に給食を食べに行く機会があった。子どもたちはみんなあいさつをしてきて非常にさわやかで教室が明るい雰囲気であった。そしてもう一つ先ほど学校教育課長から説明いただいた中で、人の役に立つ人間になりたいと思いませんかという問いにプラスの答えが多いということはすごくいい話だなと思った。このあいさつする子が多い、社会的使命感を感じている子が多いのは何か理由があると思うか。

指導主事

あいさつということでは、小学校などではあいさつ運動など期間を設けて高学年を中心に低学年をリードしながら門のところに移動して「おはようございます」とみんなに声をかける取り組みを行っている。

学校教育課長

小学校などでは縦割り班の活動を実施していて、高学年の子が低学年の子を面倒見ながら一緒に活動している。そういった意識は中学生になっても延長してつながっており、部活動や生徒会活動また地域の育成会活動、中学生ボランティアの中でも意識を持って活動している。

市長

それでは議題に足利市の子どもを伸ばしたいに戻して照本委員よりご意見を伺いたい。

照本委員

先ほど全国平均から見ると自己肯定感が少し低いとの話があった。自己肯定感とは他者や親に認めてもらうところからスタートして、自分ならこういう事ができるということで最終的には何かを粘り強く努力する時に最も必要なものではないかと思う。今、家庭教育懇談会の意見の中で、親も忙しくまた核家族化が増えてきている、家庭で教えるべきことが家庭でできていない、親も忙しくゆとりがなくなってしまうことがある、地域とのかかわりの中ではコミュニケーション不足を感じる、防犯上知らない人とは話さないなど、なかなか親と他者とのつながりが少なくなっている時代であると思う。例えば昔は家庭で

教えていたことが家庭でできていないという話については、昔の家庭の中の人
数と今核家族化、少子化で現在の家庭の中にいる人数はだいぶ異なっていると
思う。共働きであれば子どもは親と過ごす時間よりも保育園や学童、習い事や
塾で過ごす時間が多く、そういったところの大人や友達と過ごす時間の方が多
くなっていると思う。もちろん家庭でも最低限のことを教える必要があると思
うが、家庭の人数も少なく親に時間がないとなると何十年も前に想定した家庭
教育というのはとても難しいと思う。そうするともっと地域で子どもを育てて
いこうという気持ちとか実際の活動が重要だと思う。前出で出たコミュニケー
ション不足とか、近所の人がかけても防犯上の問題があるとか、また体験
に関する事で地域の行事への参加が少なくなっていて子どもたちと関わる機
会があまりないというところも、普段から地域との関わりがあれば、まったく
知らない人から話しかけられているということはないと思う。普段からよく知
っている大人の方が心配して声をかけてくれると考えることができると思う。
また、子どもにとって自分を肯定してくれる大人が多いほど自信につながりや
すいと思う。そして、心の安心感は安定した心につながると思うと、多くの大
人に見守られながら子どもたちが育っていくということが最終的には自分を認
める力、肯定感につながると思うので、もっと地域の方々に関わっていただき
子どもたちも自ら関わるようになると良い関係となり、最終的には子どもたち
の学力の向上につながっていくと思う。

市長

今最後に地域との関わりということで話が出ましたが、学校の現場の先生方
は学校のある地域との関わりについてはどんなふうに感じているのか。

学校教育課長

学校にはかなり地域の方が入ってきていると思う。ただ、大阪の池田小の事
件があって門扉を閉めざるをえない状況になっている。門扉が開いているのと
閉まっているのでは地域の方の出入りが違ってきている。以前ならば校長先
生のところにふらっと地域の方が来られたものが、門扉を開けてまでという
なかなかいかない。学校側からは、今回授業でこんな教材でこんなものを取り
扱いたい地域に教えられる人はいませんか地域指導者を公民館長や自治
会長を通じて見つけていただくなど地域の教育力を活用している学校もたくさ
んある。防犯面で地域ボランティアの方たちと一緒に下校をお願いしている学
校もある。

市長

それでは菊地委員よりコメントをお願いしたい。

菊地委員

私は教育委員になって改めて感じたことは、小学校や中学校で使っている教科書であるが、足利は良い教科書を使っているなど感じるとともに、書いてある内容を改めて読むと素晴らしいなど実感している。小学校・中学校の教科書を完璧にマスターできていれば、大人でも相当な人になると思う。教科書を軽んじるべきでなく、必要なことは全て書いてあるのではないかと思う。この年になって小学校・中学校の教科書を読んでみて感じることでそのようなことを大事にしなくてはいけないなど思っている。また、それに関連してあいさつの話が笠原委員から出ましたが、私がけやき小学校のPTAに携わっているときに、その時の斎藤校長先生からあいさつをこのように教えているというお話をいただきまして、あいさつの「あ」は明るく、「い」はいつも、「さ」は先に、「つ」は続ける、このようにあいさつをするんだよと小学生に教えていると話をしていた。非常にこれが心に残っており、当社の新入社員に対する研修も小学校の子どもたちに教えていることと同じことを最初に伝えるようにしている。このようなベーシックなことが小学校・中学校の学校教育の中でしっかり教えていただいていると感じている。また、足利市の子どもというところを考えたときには、みんな足利市のことを好きになってもらわなくてはならないと思う。当然、私の友達たちも夢を追って足利市から出ていく人がほとんどで足利に残っている人はいないが、ただ何かの時に足利は良かったなど思えるかどうか、これは極めて重要ではないかと思う。郷土愛を育むような教育というのはもっと力を入れてもいいのではないかと思う。自分の出身地の足利はこんなにもいいことがあるんだというところを東京や世界に出ていった人も語れるような、そんな教育を小さいときにすべきではないかと思う。改めて地元の魅力を探ってみるとたくさん語れることがある。私も会社の中では、朝礼などで足利の魅力をなるべく話すようにしている。当社も地元足利の人が多いため足利の人が知らないこんなすごいことをなるべく伝えるように日頃から心掛けている。そういった面でも地元を愛する郷土愛の教育はより力を入れるべきではないかと思っている。

市長

今話を聞いていて、先ほど笠原委員から逆に「足利なんて」という言い方を耳にするとその話があったが、本当にそのとおりだなと思った。今年に入って平成から令和の変わり目で繰り返しいろんなイベントにお邪魔した時に話したのは、足利学校が持っている歴史の厚みの深さ、加納治五郎がNHKの大河ドラマのいだてんで話題になったら、加納治五郎が来ていましたと書が出せたり、渋沢栄一がお札の顔になるといえば渋沢栄一が来ていたり、令和になったら万

葉集を持っている。今度は10月25日から元号展 宝暦以降令和まで21の元号を連続して展示できる。248の元号の内、8割の典拠となる書物を持っている、比較のしようもないが、おそらく圧倒的に日本で唯一の施設であると思っている。なおかつ足利学校アカデミーなどで来てくれる先生方にご挨拶で話をすると、必ず漢文関係の先生方は「足利学校は聖地です」という言い方をこぞってしてくれる。私は市長になってこのようなことに触れるようになって強く思うようになり発信するようになった。子どもころあるいは市長になる前にそこまで強く足利が持っている歴史に絡む強さと魅力の奥深さを思っていたかと言えば決してそうではない。そういう意味ではいろんなチャンネルを通じて子どもたちに伝えると同時に改めて市民に伝えていくことは大変重要と思っている。そういうところから今につながるいろんな取組がつながってくる。今回、記者会見で足高足女の統合と新市民会館の話をした。そこでも多くの市民が共感してくれると思うのは、足利学校がある街にふさわしい新高校の学び舎を作っていく、こういうことが言えるまちであるという意味の大きさに改めてみんなで共有したほうが良いと思った。それでは教育長よりコメントをお願いしたい。

教育長

足利という素晴らしさを子どもたちに実感させてどう育てるか、やはり郷土愛を育てていきたいと思う。自分自身が生まれたところから離れて足利で働いていて年に何回か帰る、やはり故郷というのはいいですね。特にすごい文化財などがあるわけではないが、子どもの頃、川や野原で遊んだ思い出、それが自分にとっては郷土を大事にしたいなという気持ちである。それから子どもたちにも夏休みにはなるべく体験しようよ、野山で遊ぼうよ、というような呼びかけを学校を通してしている。子どもたちに足利の素晴らしさというのは、外に出ていろいろな人との関わりがあり、お店のおばさんのところに飴玉を買いに行ったり色々な人から声をかけてもらったりしたことなど、大きくなっていいなと思うのは地域の人との関わりとか、故郷の山とか渡良瀬川とかがいつまでも自分にとっては子どもに思い出してもらいたいなと思う。前にもお話をしたと思うが、他所で働いている教え子が東武足利市駅に着いて、そしてホームから渡良瀬川が見える、中橋が見える、向こうの山上には織姫神社が見えると、その光景を見たときに思わずその子は「ああ足利はいいな」とつぶやいた。子どもたちにはぜひ故郷を愛する子になっていってほしいと思う。

また、今教育委員会は学校教育指導計画を基に子どもたちを育てようとしている。この中電話番号は目指す子ども像の目標に「豊かな心を持ち、たくましく学ぶ足利っ子」を掲げ、そのために学校教育を進めていくうえで三つの視点を盛り込んでいる。一つ目は、自分自身の考えをしっかりと持てる子どもにした

い。二つ目は、人間関係づくり。子どもが大人になるにつれて、色々な人とかわる機会が増えてくる。自分とは違う考え、あるいは世界の人々とつきあうことになれば、自分とは違う文化や生活習慣の人とつきあうことになる。その時に、うまくつきあえるような人間関係がつかれる人になってほしい。三つ目は、主体的な生き方。この主体的な生き方というのは、足利市の教育目標を作った時に、私が若い頃であるが、お茶の水女子大学の河野重男先生という方が足利に来て、困難に打ち勝って疲れずという言葉をおっしゃっていた。この言葉は私が作ったのではない。大正・昭和の初めの頃にお茶の水大学附属幼稚園の園長先生、倉橋惣三先生、という方が今から何十年も前にこれからの社会、困難に打ち勝ち疲れずというものが求められ大切になるよとおっしゃっていたのが今でも記憶に残っている。まさに足利の子どもたち、これから将来色々なことにぶつかると思う。そこから逃げてはだめだと、そんな力を子どもたちに持たせられたらと思っている。

市長

最後、私の方から、足利の子どもたちが置かれている現状がいろんな面から多角的に浮かび上がってきた。スマホやあいさつの話をした。置かれている現状がいろんな角度から湧き上がってきたなと思った。これをどういうふうに我々の仕事として政策におとしていくかということを含めて大変有意義であった。と同時に冒頭教育長から文科省のパンフレット、生きる力学びのその先へということで新しい学習指導要領スタートし、生きる力とあって先ほどのご紹介にもあったように自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動するという力をつけさせる、考えてみると実は子どもでなくても我々大人・社会人にも当てはまる呼びかけであると思う。一生学び続けるという言い方があるが、先ほど菊地委員もいみじくも言われたが、教育委員になって改めて教科書を読んでみていいことが書いてあると気づいたと話されたこともそうである。私も市長になってからいろんなことが気になるのでいろんなことを勉強するということがおのずと続いている。子どもたちが常に色々なテーマで自分がそこにいたらどうだろう、自分が当事者だったらどうだろうなど想像力を持てるような教育現場での導き方が大切だと思う。また市の幹部会議で庁議というのがある。平均すると3～4回に1回ですが、気づいたこと、気になるニュースがあった時、新聞記事であれば記事をコピーして幹部に配り、私なりに思ったことなど話をするようにしている。今日この会議に来る前に市長室でたまった新聞とか雑誌を整理していてあっと思ったのは、最近であると例えば大船渡高校の佐々木君という163キロを投げた子が、実は決勝戦で登板させてもらえなくて、今もっていろんな議論の対象になっている。最近の週刊文春に野球のコラムがあり投げさせなかった監督を大変評価する趣旨のコラムになっていた。

一方で私は知らなかったのであるが、張本さんがTBSの日曜の朝の番組で投げさせなかったのはけしからんとコメントし物議を醸しだしている。庁議の中では皆さんが監督だったらどうしたと投げかけている。また、2年ぐらい前になるが日本人横綱の稀勢の里が腕をけがして次の場所に無理して出ている。その後、無理がたたたり、休場続きでやめてしまったが、無理しないで治療に専念しなよという支える側の声がなかったのか。あの時もちょうど庁議があったので皆さんが稀勢の里を支えるチームであったらどうしたかなど聞いた。中学生くらいだったら、皆さんが将来高校野球の監督で佐々木君のチームの監督だったらどうしたかと聞くことができる。このように新聞・雑誌等の記事はいつでも教材となりうることで、そういうことから学ぶことができる。その取り組む姿勢が想像力として身につくと歴史の授業も楽しくなると思う。常に自分をそこに持っていけるような想像力、そういうことがひとつあるとあらゆる面でこれから、伸びていけると思った。

今日、生きる力というのを聞かせていただき改めて思った。色々な論点は尽きないと思う。スマホの話が出ればお互いの話があり地域の関わりがあり、あるいは照本委員がおっしゃったように昔のような家庭教育力というのはそのまま求められるような時代ではないというのも現実であり、ではどういう工夫をしていくか、これも簡単には答えにたどり着けないが、あらゆる場面で分析と議論と点検を繰り返す中で、少しでも子どもたちにとって良い効果が生まれるような政策を探って行きたいと思った。

事務局

その他は特にないので、これで、令和元年度の第1回総合教育会議を終了する。

○閉会 午後5時15分